

幼児教育史学会

第20回大会プログラム

- I. 期日：2024年12月7日（土）大会
2024年12月8日（日）関連企画
- II. 会場：福岡大学 図書館1F「多目的ホール」（両日）
福岡市城南区七隈 8-19-1

III. 大会日程

12月7日（土） 大会

9:00	10:00	12:45	14:00	16:30	16:45	18:00	20:00
受付	個人研究発表	昼食	シンポジウム		総会		懇親会

全て「対面」で行います。

昼食時、学内食堂が営業していません（各自、ご用意下さい）。

懇親会は大会会場横の「陽だまり」で行います。

※懇親会参加者数を知りたいので、参加希望を大会事務局（ykatsu@fukuoka-u.ac.jp）までメールでお知らせ下さい。キャンセルも、当日参加も可能です。

12月8日（日） 関連企画

9:00 9:30 12:00

受付	愉フォロ會
----	-------

全て「対面」で行います。

IV. 大会参加費・懇親会

大会参加費は、会員・非会員ともに1,000円、大学院生は無料。懇親会は、大会会場横の「陽だまり」にて行います。参加費は、会員・非会員ともに4,000円です。

V. 大会日程

【個人研究発表】10:00～12:45（一人あたり30分／発表25分・質疑5分）

司会：榊 瑞希子（聖徳大学（名））草野 舞（尚絅大学）

(1) 10:00～10:30 菅原陽子（聖学院大学大学院生）

『子供の教養』誌におけるG.E. キュクリヒの家庭教育—ドイツの家庭生活とフレーベル思想に関する論考を中心に—

- (2) 10:30～11:00 中村美和子 (お茶の水女子大学)
細川武子の児童文化活動と教育活動のかかわりー昭和前期を中心に

<休憩>

- (3) 11:15～11:45 田中卓也 (育英大学)
小学館における幼児対象雑誌の発刊と「よい子」像の形成

- (4) 11:45～12:15 柴田賢一 (常葉大学)
近代初期イングランドにおける幼児の「教育」をめぐる考察ー家政論史料を中心にー

<総括討論> 12:15～12:45

VI. シンポジウム 14:00～16:30

演題「第20回大会を機に幼児教育史研究の在り方を考える」

○提案者:

- 湯川嘉津美 (上智大学): 日本の幼児教育史研究から
畠山祥正 (元茨城キリスト教大学): フレーベル・幼児教育史研究におけるキリスト教理解から
塩崎美穂 (東洋英和女子大学): 幼児教育・保育実践を踏まえた幼児教育史研究から

○指定討論者:

- 浅野俊和 (中部大学)

○司会者:

- 船越美穂 (福岡教育大学)

(趣旨)

幼児教育史学会では、2007年の第2回大会で「日本における幼児教育史研究の到達点とその課題」と題するシンポジウムを行った。その際、とくに強調されたのが、幼児期に限定した歴史研究の意義、史資料を使った実証性、幼稚園運動史や保育者養成史、保育思想史の掘り下げであり、なかでも通史の執筆が「決定的に大事」(宮澤康人氏)とされた。例えば、フレーベルの幼稚園が誕生した当時のドイツで、どれくらいの子どもがどのような就学前施設に通っていたのかが不明であると。そのような経緯もあり、本学会は学会創設15周年を機に、『幼児教育史研究の新地平』上巻(2021)、下巻(2022)を上梓した。このなかで、おおよそ19世紀から20世紀にかけての日本、西洋、アジア、オセアニアなどを含む、国内外の幼児教育・保育の歴史を網羅した。内容的にも、第2回大会で課題とされた幼児期に限定した教育史研究の在り方や、その実証主義的手法、幼児教育・保育方法の探究や保育者養成への貢献などが一定達成されたと思う。

そこで第20回大会では、本学会の中心的メンバーとして学会活動を支えてこられた会員に、自らの研究史を振り返りながら幼児教育史研究の在り方を提案していただこうと思う。まず、湯川会員には、日本の幼児教育史研究について、畠山会員には、フレーベルを中心に幼児教育史研究についてキリスト教の視点を踏まえて、塩崎会員には、幼児教育・保育の実際を視座に

据えた幼児教育史研究についてそれぞれ語っていただくことで、これからの幼児教育史研究の在り方を探していきたい。

VII. 総会 16:45~18:00

◎関連企画（愉フォロ会）のご案内

大会翌日「海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会（愉フォロ会）」を開催いたします。

日時： 12月8日（日） 9時半から 図書館 1F「多目的ホール」

内容： 畠山祥正氏（元茨城キリスト教大学）による「フレーベルの足跡をたどる旅 2024—訪問先の概要（含地図）と旅行ノウハウ」

畠山氏より：2024年8月、6人のグループで、Bad Blankenburg を拠点に、フレーベルのチューリンゲンの関係地を4日間旅しました。幼稚園だった博物館、Oberweissbach の生家＝博物館、Keilhau から Froebelblick を経由し Bad Blankenburg に降りるハイキング、Schweina の墓地等です。旅行初心者の企画でしたが、ドイツ鉄道の不便さをアプリを使って克服するなど、事前に教わったノウハウを活用しました。訪問先の概要と旅のノウハウをお分かちできたらと思います。

【個人研究発表の概要】

(1) 菅原陽子（聖学院大学大学院生）

『子供の教養』誌における G.E. キュックリヒの家庭教育—ドイツの家庭生活とフレーベル思想に関する論考を中心に—

ゲルトルート・エリザベート・キュックリヒ(1897-1976)は、1922年にアメリカの福音教会から日本に派遣されたドイツ人女性宣教師である。キュックリヒはドイツ福音教会牧師の娘であり、福音教会フレーベル・セミナーにおいて幼稚園教諭としての専門的訓練を受け、1921年に幼稚園教諭養成上級教師の国家資格を取得した。日本に渡った1922年以降、東京保育女学院、東洋英和女学校幼稚園師範科、草苑高等保育学校、和泉短期大学など、複数の教育機関において保育者養成に従事し、保育施設や孤児院「愛泉寮」の設立にも寄与した。また、キリスト教保育連盟の要職を担い、日本における幼児教育および福祉分野に顕著な貢献を果たした。

これまでの研究では、キュックリヒの実践的な側面が主に取り上げられており、彼女の理論的貢献に対する評価は十分ではなかった。しかし、彼女が1933年から1946年にかけて寄稿した『子供の教養』誌には、ドイツの家庭生活やフレーベルの思想に関する論考が含まれており、これらの著作は彼女の理論的貢献を探る上で重要な資料である。

『子供の教養』誌は教育図書出版「子供の教養社」により1929年から1953年まで刊行（ただし戦時中は休刊）された家庭に向けた教育雑誌であったが、保育者や新教育の立場に立つ教師にも広く読まれていた。この雑誌は、阿佐ヶ谷教会牧師かつ阿佐ヶ谷幼稚園園長であった高崎能樹を主筆とし、現場の教師、園長、医者その他、文筆家、学者、画家など、多様な専門家が寄稿しており、その内容は、大正デモクラシーの自由教育、新教育の流れを受けた教育思想、さらにはキリ

スト教に関連する教育観が色濃く反映されていた。

本発表では、『子供の教養』誌の執筆者の中で唯一の女性宣教師であるキュックリヒによるドイツの家庭生活やフレーベルの思想に関する論考を基に、彼女の家庭教育に関する考察を行う。

(2) 中村美和子 (お茶の水女子大学)

細川武子の児童文化活動と教育活動のかかわりー昭和前期を中心に

細川武子 (1892-1956 年) は子どもと女子の教育に実績があった教育者で、児童文化のにない手としての顔もあった。本研究では、彼女の児童文化活動と教育活動のかかわりを探究していくが、その際、1931 年から 1945 年までに公刊された童話作品を焦点化し、それらに国民形成に資すどのような要素がふくまれるかを検討する。

細川は 1912 年に東京府女子師範を卒業後、小学校に奉職し、1926 年からは調布高等女学校 (現 田園調布学園中等部・高等部) の副校長と調布幼稚園長を務めた。1942 年に立華高等女学校を創立し校長となる。同校は 1954 年に幼稚園を併置した。戦後は、複数の幼稚園の顧問としても活躍した。

女性教育者として指導的立場にあった細川は、1915 年に新聞懸賞で入選して以来、諸雑誌に童話を発表し、口演童話家の多い複数団体で童話の語りを研究していた。そもそも教職を志したのは元来のおはなし好きからで、調布高等女学校には女学生らの童話研究会が結成され、1931 年当時、100 人の会員を有したという。1933 年には、建国一年を経た満洲に親善人形使節を率いて渡っている。幼児と児童、女子の教育に知悉した人材として、国家的事業をになう期待がかけられたことわかる経歴である。

戦時中は銃後を守る軍国の妻の姿を説く文章を多く執筆し、銃後にふさわしい童話を創作した細川は、戦後になると新しい時代にふさわしい女性像を打ち出す論稿を発表した。各界の指導的立場にあった人物が、その経験やリーダーシップ能力により、戦後も引きつづき戦前同様の活躍をしつづけた例は散見され、幼児教育界でも倉橋惣三の戦前戦中戦後がしばしば議論されてきた。細川の生涯は、そうした議論に比較の視座を与えるものとして、今後の掘り下げがもとめられる。本報告は、その取り組みのための足がかりの一つである。

(3) 田中卓也 (育英大学)

小学館における幼児対象雑誌の発刊と「よい子」像の形成

本発表は、老舗出版会社の一つである東京一ツ橋に社屋を構える「小学館」の幼年向け雑誌の発刊について考察検討を試みるとともに、小学館が読者に求めたいいわゆる「よい子」像の形成について見いだしたいと考える。「ピッカピカの一年生」のテレビCMはおなじみのことであろう。誰もがどこかで聞いたことのあるフレーズで、有名な『小学一年生』をはじめ『小学二年生』、『小学三年生』、『小学四年生』、『小学五年生』、『小学六年生』といったいわゆる「学年別学習雑誌」を大正末期から発刊し、長い間にわたり、児童読者らの興味関心をひきつけ、多くの読者を獲得した。学習教材を盛り込みながら、マンガや懸賞付録など、小学生の心を虜にした。虜にされた発表者もかつて同誌の愛読者であったことをことわっておきたい。

しかしながら、同出版社は、幼児向け雑誌の発刊にも力を注いだ。古くは『幼稚園』(1932年刊行)を筆頭に、第二次世界大戦後には『めばえ』(1956年刊行)『よいこ』(1966年刊行)、『ベビーブック』(1966年刊行)が相次いで世に出た。ところが『めばえ発刊後に『よいこ』が

刊行され、幼児の年齢対象が重なり、曖昧になり1995年に統合・休刊を余儀なくされる。また講談社などのライバル競合誌の登場により、『小学●年生』のように学齢を明確にできず混迷していた事情がうかがえ「学年別学習雑誌」から脱却できない事情があったものと考えられる。また小学館が読者に求めた「よい子」像についても、雑誌対象においていた幼児と児童のはざまでスムーズな形成がなされなかったのではないかと考える。

(4) 柴田賢一（常葉大学）

近代初期イングランドにおける幼児の「教育」をめぐる考察—家政論史料を中心に—

初期近代と言われる16, 17世紀のイングランドにおいては、子どもの「教育」は主に家政 (household) における営みであった。それは本発表において対象とする「幼児」についてはより一層あてはまる。のちのいわゆる近代家族は、その役割の中心に子どもの教育を据えていくと言われるが、初期近代において早くもその萌芽がみられると言われるほど、子どもについては家政の在り方を説いた家政論文献群に頻繁に記述される。

近年、初期近代の子どもについての研究にも進展がみられ、病児や私生児などその対象も多様化しているが、こと「幼児」については、比較的最近出版された研究書においても、“infancy”と題された章ではその多くが洗礼と現在について述べられるだけで、本発表が関心を寄せる「教育」の在り方等については触れられていない (French, Anna, *Early Modern Childhood: An Introduction*, Routledge, 2020)。そこでは史料の得難さが課題として挙げられているが、意外にも「幼児」を著す言葉の一つである infancy は当時の史料に頻繁に表れる。本発表では、家政論を中心としたそれらの史料に着目し、初期近代の「幼児」について明らかにしていきたい。

本発表の関心の所在は単純である。初期近代のイングランドにおいて「幼児」はどのような存在として受け止められ、育てられ、“教育”されようとしたのか。具体的に、何歳から何歳までが「幼児」として受け止められ、その子どもたちにはどのような育て方がなされ、「教育」がなされようとしたのか。そのような単純な問いにもまだ十分に研究が蓄積されてきたとは言い難く、史料分析を重ねる必要があると考えられる。

<大会に関する問い合わせ先>

幼児教育史学会第20回大会開催実行委員会

福岡大学人文学部 勝山吉章研究室内

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1

電話 (092) 871-6631(内線 3812) FAX (092) 871-6654

E-mail : ykatsu@fukuoka-u.ac.jp

- ※ 福岡大学へは、福岡空港から博多駅乗り換えで全て地下鉄で繋がっています。
福岡空港から：地下鉄「空港線」で「博多駅」で乗り換え、地下鉄「七隈線」で「福大前」へ
博多駅から：地下鉄「七隈線」で「福大前」へ
福岡空港および博多駅から大会会場まで、所要時間は約1時間を目処にしてください。

福岡は東京や大阪並みのコンサートや学会が開催されることが多く、常にホテル不足です。早めにホテル等を抑えておかれることをお勧めします。ホテルは、博多駅、地下鉄七隈線の櫛田神社前、天神南、渡辺通、薬院、薬院大通、桜坂の各駅周辺が便利です。